

## 室内装飾における西洋風の受容と葛藤

待鳥邦会, 横川公子  
(武庫川女子大学・生活環境学部・生活環境学科)

### Acceptance and conflict of Westernization in interior decoration

Kunie Machidori, Kimiko Yokogawa

*Department of Human Environmental Sciences,  
School of Human environmental Sciences, Mukogawa Women's University*

#### Abstract

In this paper, we took up a representative women's magazine of the era into consideration, the Fujingahou, and decided to investigate about "interior decoration" (Shitunai-sousyoku) as the term most similar to "interior design". In the timespan we investigated, the word "interior design" had not yet come into use. Using the magazine Fujingahou (1906.7~1944.4), we investigated all articles referring to interior decoration or "Shitunai-sousyoku".

In this article we analyze the references to walls, interior fabrics, furniture, interior ornaments found in the magazine. As a result of this investigation, we conclude that westernization of interior design of in middle-class homes Japan began with the introduction of the western-style furniture and the decoration of the western-style window.

#### はじめに

近年、インテリアコーディネート、トータルインテリアなどの言葉が、日常生活の中の様々な場面で登場するようになり、インテリア関連書籍や雑誌等も数多く発刊されている。西洋建築が日本に導入されたことが、日本のインテリアに及ぼした影響は大きいですが、日本においてこの“インテリア”が産業として認知されるようになったのは、昭和40年代であり(東京室内装飾事業協同組合, 1990, p.41)、西洋建築の受容に比較して新しい。

現在でも、インテリアは「建築の後付け」のように理解されている。つまり、設計が全て終了し、プラン変更が不可能な状態で、インテリアのプランに着手するということが往々にして在り得るのである。ここでは、インテリアコーディネートとは、床・壁・天井の色選びであり、家具配置やそれによる建築本体との関係性は考慮されないことになる。

本来のインテリアコーディネートとは、色選びだけでなく建築との繋がりの中で、住み手の生活をつくり上げるものだと思うのだが、日本の住宅におけるインテリアは必ずしもそうではないようだ。建築の西洋化の中で、これらは具体的な生活の中にどのように浸透してきたのだろうか。

本稿では、婦人雑誌『婦人画報』(明治39年7月号~昭和19年4月号)を主な資料として、“インテリア<sup>1)</sup>”に類似の対象として取り上げられている“室内装飾<sup>2)</sup>”について、調査を行うこととする。その際に、調査対象を記事中の室内装飾関連用語とした。なぜなら、記事中の用語には時代が反映されており、その時代に関心が強い内容については幾度となく記事に取り上げられ、用語の登場頻度も高くなると考えたからである。

## 1. 近代までの室内装飾

本題に入る前に、日本在来のインテリアの状況を確認するために、『日本住宅室内装飾法』（杉本文太郎, 1911）を参照し、各時代の室内装飾の特徴をまとめた。本書によれば、近代以前の室内装飾法とその変遷の大枠がわかる。まず、それに従って各時代の室内装飾法をみていくこととする。時代の名称は本書に従っている。

I. 奈良朝時代(710-794)は、床は板敷で敷詰の畳はなく、座敷というのは今日のように室の名を示すものではなかった。

当時は簾及び几帳、屏風を立てるのみで、室内は出来るだけ飾らないことを重視したことがわかる<sup>3)</sup>。

II. 平安朝時代(794-1192)は、所謂、寝殿造に代表される時代であり、この時期に宮中において室内装飾が進歩発展した。ただし、何事もその外形の美のみに尽力し、実用性を欠いていたとされる。飾ることに関しては、主人や官位の位置や方位と装飾品の位置関係などに決まりがあり、時々に応じて設えを変えていたようである。

III. 鎌倉幕府時代(1192-1338)は、武家と公卿が隔立し、文化は依然として公卿に属していたため、武家における室内装飾は殆ど完成したものはなかった。公卿に対し、武家の室内装飾は質素なものであったが、明障子の使用に伴い、美を外部へと求めた。その結果として、庭園の発達が著しい時代であったと言われている。

IV. 足利氏幕府時代(1338-1582)は、間接的にも直接的にも茶道が室内装飾に大きく影響を与えた時代である。家屋は寝殿造から武家の家屋である書院造に一変し、その特徴は、形式的かつ実用的なことを趣旨とした。また、茶道は平民的遊藝として、香道は貴族的遊藝として装飾への影響力を持った。そして、床・掛物・座敷等全ての装飾の“調和”をもって、完全な装飾としたようである。

V. 豊臣氏時代(1582-1600)は、茶室造が発達した時代で、これは書院造に著しい進歩をもたらした。この時代の室内装飾は、自然の調和に基づいたものが良いとされ、自然は美の根本であると言われている。また、茶道の流行により、香道や生花が進歩発展した。この影響は、床脇の棚類に様々なバリエーションをもたらしたとする。その他、この時代は海外物品の交易が盛んとなり大小名の邸宅が舶来品により全美を極めたともされる。

VI. 徳川氏幕政時代(1600-1840頃)は、平安朝と並んで文化の発達が著しい時代であったとする。建築は、前時代の書院造を継承し、茶道をはじめ、香道、花道の発達進歩は著しく、それらが室内装飾に及ぼした影響は大きかった。床や棚などの種類の増加や床柱に初めて角柱が用いられるようになったこと、また、金物細工や木細工、人形細工などの細工モノが流行するなど、技術的な進歩も確認できる。併せて、色の調和についての関心<sup>4)</sup>が強まっていたようでもある。

以上のように、時代毎に特徴がみられるが、足利氏幕政時代以降、盛んになり始めた茶道が、室内装飾の展開に大きく影響を及ぼしていることは注目できる。

また、著者が、各時代の室内装飾法のまとめとして“室内の装飾における3つの法則”を挙げていることも注目できる。すなわち「一. 重複を避けねばならぬ 二. 陰陽を調へねばならぬ 三. 物品其物の本来を知らねばならぬ」であり、さらには、日本人が室内装飾において重んじたことが、ただ見た目に美しいものではなく、自然であり、調和であり、感触を伴う風情であるとした<sup>5)</sup>。

## 2. 『婦人画報』における室内装飾

### 2-1. 『婦人画報』について

『婦人画報』は、以下のように改題と版元変更を行なっている。

I. 『婦人画報』（近事画報社刊）第1巻第1号（M38.7）～第3年第6号（M40.6）

II. 『東洋婦人画報』（東京社刊）第1号（M40.8）～第24号（M42.3）

- Ⅲ. 『婦人画報』（東京社刊） 第 25 号(M42.4) ～第 482 号(S19.4)
- Ⅳ. 『戦時女性』（東京社刊） 第 483 号(S19.5) ～第 493 号(S20.9)
- Ⅴ. 『婦人画報』（婦人画報社刊） 第 494 号(S20.10) ～第 1156 号(H11.11)
- Ⅵ. 『婦人画報』（アセット婦人画報社刊） 第 1157 号(H11.12) ～現在に至る

今回の研究には、明治から昭和戦前期にかけての室内装飾について DVD 版として収録されたⅠ～Ⅲ、つまり『婦人画報』（M38.7～M40.6）、『東洋婦人画報』（M40.8～M42.3）、『婦人画報』（M42.4～S19.4）の記事を用い、第一次世界大戦中までを対象とした。（以下、雑誌名を『婦人画報』とする。）『婦人画報』を取り上げた主な理由は、以下の 4 点である。

①明治末期から大正、昭和に渡り発行されていること。②都市部における中間層の家庭婦人を主な対象とすること。③ DVD-ROM により原本を確認できること。④近代化の影響を受けた時代の記事が確認できること。

目次から“室内装飾”をキーワードにして関連記事を検索した結果、明治期 6 件、大正期 8 件、昭和戦前期 28 件を入手することができた。さらに掲載記事に使用されているインテリア関連用語を抽出し、以下の表 1～4 のようにまとめた。これらの用語については、実際に DVD-ROM より原本をプリントアウトしたもので確認した。

## 2-2. 室内装飾の対象と記述

表 1～5 は、掲載記事に登場する室内装飾関連用語を現代のインテリア項目に対応する「壁面(窓装飾を含む)・ファブリック・家具関連・小物・その他」の 5 項目に分類し、各々明治期・大正期・昭和戦前期の時代順に区分したものである。カーテン関連の用語については、窓の装飾物として「壁面」と関係が深いことからそれに含むこととし、複数回記事に登場した用語については[回数]を表記した。なお、昭和戦前期に関しては出現用語数が多く、紙面の都合上、出現頻度の高かった用語と特徴的だと思われる用語のみ表中に示し、単数のものを一部省略した。

表 6 は、記事中に登場した「室名」について、他の項目と同様にまとめたものである。以上 6 項目の対象について、用語の登場件数と種類に注目し、検討することとする。

[表 1] 壁面(窓装飾も含む)

明治期	大正期	昭和戦前期	
壁紙 紙張壁 壁の色 カーテン(窓掛) レースの窓掛 窓 硝子窓 硝子戸	壁紙[4] カーテン(窓掛) [4] 壁の色[3] 壁[2] レースの窓掛 壁張 ステンド・グラス	カーテン(窓掛) [18] 壁紙[11] 窓[7] 壁[5] 壁の色[3] フレンチ・ケースメント ブラインド シェード バランス 入口飾 美術壁 壁のお化粧	扉 ドア 仮想窓 窓棚 ガラス障子 壁にかかっている幕 出窓 レースの窓掛 つや消しガラス すかしガラスの窓建具 日本壁 ガラス戸

[表2] ファブリック

明治期	大正期	昭和戦前期
靴拭い(マット) 絨毯 カーペット	敷物[5] 絨毯[2] クッション[2] 椅子張[2] テーブル掛 フロアクロス リノリウム フェルト テーブルクロス	絨毯[7] 敷物[5] クッション[8] カーペット[5] テーブル掛[3] 椅子張[2] 椅子のカバー [2] テーブルクロス センター・ピース ティーナプキン ベッドカバー

[表3] 家具関連

明治期	大正期	昭和戦前期	
椅子[3] テーブル(卓子) [2] 本棚 飾棚 机 臺 暖炉 オルガン	テーブル(卓子) [5] 椅子[3] 長椅子[3] 肘かけ椅子 家具 棚 コーヒーテーブル 籐椅子 暖炉	椅子[15] テーブル(卓子) [12] 家具[8] ソファ [7] 書棚[5] 安楽椅子[5] 寝臺[4] 暖炉[3] 小椅子[3] 籐椅子[3] 長椅子[3] 洋服箆笥[2] ピアノ[2] 書机[2] 腰掛[2]	アーム・チェア[2] マントルピース[2] 肘かけ椅子[2] ティテーブル 食卓 中心テーブル 圓卓子 サイドテーブル ベッド

[表4] 小物

明治期	大正期	昭和戦前期
額[3] 姿見[2] 鏡[2] 時計[2] 花瓶[2] 花活 ランプ 額縁 硝子 盆栽 火鉢 坐蒲団 懸物 四季折々の花・枝 コレクション 置物 像 幅 珍像・珍書・珍器 洋画の掛額	置物[2] 生花[2] 盆栽 額 花瓶 植木 金魚 絵 陶器 壺 花卉 茶器 洋画の掛額 日本画 軸もの 電燈の笠	電燈具[7] 電気スタンド[5] 額[4] 額縁[2] 美術工芸品[2] 植木鉢[2] 電燈の笠[2] 姿見[2] ストーブ[2] ブラケット[2] ガス燈 電気燈 天井燈 壁燈 シャンデリア 掛軸 置物 盆栽 花の籠 一輪ざし 切り花 器もの ランプ 花瓶

[表5] その他

明治期	大正期	昭和戦前期
掃除[2] 床[2] 色彩(いろどり) 光線の具合 整頓 清掃 和洋折衷 花壇 訪問時間	住宅の改良 洋館 寄木細工の板張り 色彩(いろどり) 和洋両用建具 人間味 藝術的感受性 暖色 配列 日光 洋室の床の間 壁面の利用 震災 和洋折衷 洋風和化・和風洋化 個性的な趣味	椅子式の床 天井[5] 床[4] 床の間[3] モダン[2] 団欒[2] 住み心地 お茶の間 押入れの改良 寒色・暖色 均等照明 局部的照明 建築化照明・光築 色彩 色の配合 国民性 アパートメント ファイヤープレイス 単純化 モダン・リビング

[表6] 室名

明治期	大正期	昭和戦前期	
日本室[3] 客室[3] 応接室[2] 寢室[2] 西洋間 日本間 西洋室 座敷 寢床 食堂 階段 廊下 浴室 便所 台所 化粧室	西洋間[2] 日本間[2] 日本風のお座敷[2] 日本室 日本風客間 日本座敷 居間 洋室 洋風応接室 準西洋間(※1) 談話室 純日本風の古式な畳敷 古風な客室 洋風の室 縁側 洋風婦人室	居間[11] 書斎[6] 食堂[7] 日本座敷[6] 寢室[5] 洋室(洋間)[3] 応接間[4] 客間[4] リビングルーム[2] 日本風の室内[2] 西洋間[2] 日本風の座敷[2] 食事室[2] 洋風の室内[2] 在来の座敷 日本間[2]	日本室[2] 応接室 西洋室 談話室兼食堂 玄関 台所 配膳室 納戸 浴室 子供室 寢間 玄関広間 階段室 洋風居間 洋風応接室

※1 日本間に椅子と卓を置いた室<sup>9)</sup>

### 2-2-1. 壁面(窓装飾を含む)

表1より壁面に関する用語としては、明治期が8件、5種類。大正期が16件、5種類。昭和戦前期が72件(表中63件、その他に9件)、14種類(表中13種類、その他に1種類)を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①壁紙、紙張壁②壁の色③カーテン(窓掛)、レースの窓掛④窓、硝子窓⑤硝子戸
- ・大正期 : ①壁紙、壁張②壁の色③カーテン(窓掛)、レースの窓掛④壁⑤ステンド・グラス
- ・昭和戦前期 : ①壁紙②壁の色③カーテン(窓掛)、レースの窓掛、フレンチ・ケースメント、ブラインド、シェード、バランス④窓、出窓、すかしガラスの窓建具⑤壁、日本壁⑥入口飾⑦美術壁⑧壁のお化粧⑨扉、ドア、ガラス障子、ガラス戸⑩仮想窓⑪窓棚⑫つや消しガラス⑬壁にかかっている幕 他1種類

これによると、まず使われている関連用語が、明治期から昭和戦前期の約40年間に種類、数ともに増加していることがわかる。また、主要用語に関しては、どの時期においても壁紙・壁の色・カーテンであることがわかる。時代を経るにつれ、カタカナ用語も増えており、特にカーテン類については顕著で、用語としての登場頻度も高いことから、西洋風需要の室内装飾として、これらは最も関心が寄せられていた対象であったことが窺える。

昭和戦前期になると、扉やドアが登場してくる。これらについては元々日本家屋にはなかった概念であり、装飾というよりむしろ、建築そのものが西洋化してきたことがわかる。その他、ガラス障子やガラス戸のように、敢えて“ガラス”と表記している用語に関しては、従来の紙の障子や板戸などとの差別化を図ると同時に“ガラス”という新しい素材を啓蒙していこうとする意図があったと考えられる。以上より、当時の壁面装飾に関しては、窓周辺の装飾に強い関心があったといえるだろう。

### 2-2-2. ファブリック

表2よりファブリックに関する用語としては、明治期が3件、1種類、大正期が16件、4種類、昭和戦前期が36件、6種類を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①靴拭い(マット), 絨毯, カーペット
- ・大正期 : ①敷物, 絨毯, フロアクロス, リノリウム, フェルト②クッション③椅子張④テーブル掛, テーブルクロス
- ・昭和戦前期: ①敷物, 絨毯, カーペット②クッション③椅子張, 椅子のカバー④テーブル掛, テーブルクロス, センター・ピース⑤ティナープキン⑥ベッドカバー

最も特徴的なことは、どの時期においても“敷物”に関する用語が全体の半数程度を占めていることである。具体的には、明治期は全て、大正期は16件中10件(敷物, 絨毯, フロアクロス, リノリウム, フェルト), 昭和戦前期は36件中17件(敷物, 絨毯, カーペット)が“敷物”に関する用語ということになる。さらにその内容については、大正期に登場していたフロアクロス, リノリウム, フェルトなどが、昭和戦前期には見られなくなり、現在でも住宅の“敷物”として流通する用語、「敷物, 絨毯, カーペット」に集約されていることがわかる。

また、大正期から昭和戦前期にかけて、クッションや椅子張, テーブル掛など椅子やテーブルの周辺用語の登場頻度が増加している。これは建築の西洋化による椅子やテーブルの普及によるものと考えられる。その他、カタカナ用語が多く登場していることも特徴である。

### 2-2-3. 家具関連

表3より家具関連の用語としては、明治期が11件、7種類、大正期が17件、5種類、昭和戦前期が108件(表中88件, その他に20件), 12種類(表中9種類, その他に3種類)を確認できた。家具を分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①椅子②テーブル(卓子), 机③本棚④飾棚⑤臺⑥暖炉⑦オルガン
- ・大正期 : ①椅子, 長椅子, 肘かけ椅子, 籐椅子②テーブル(卓子), コーヒーテーブル③棚④暖炉⑤家具
- ・昭和戦前期: ①椅子, ソファ, 安楽椅子, 小椅子, 籐椅子, 長椅子, 腰掛, アーム・チェア, 肘かけ椅子②テーブル(卓子), ティーテーブル, 食卓, 中心テーブル, 圓卓子, サイドテーブル③書棚, マントルピース④暖炉⑤寝臺, ベッド⑥洋服箆⑦ピアノ⑧書机⑨家具 他3種類

ここでも、明治期から昭和戦前期にかけて、その件数とバリエーションが飛躍的に増加している。特にそれは、“椅子”と“テーブル”で顕著にみられ、急激な用語の増加が確認できる昭和戦前期においては、“椅子”と“テーブル”だけで59件(“椅子”41件, “テーブル”18件)あり、全体108件中の半数以上の記事で“椅子”と“テーブル”が取り上げられているのである。

また、昭和戦前期に「ピアノ」とあるが、これはこの当時ピアノが装飾品の一部として扱われており、

中流階級以上の家庭にはなくてはならない、謂わばステータスの象徴であった(福島琢郎, 1927)ようである。

更に、「家具」という用語については、大正期に1件、昭和戦前期に8件確認できたが、この内容は定かではない。恐らく家具自体にあまり馴染みがなかった日本人ゆえに、椅子やテーブル、その他西洋化に伴う装飾品全般を指して、“家具”と言ったのではないと思われる。

以上より、家具関連の項目からは、西洋風の象徴とも云える“椅子”と“テーブル”の啓蒙、そして、装飾品として扱われていた「ピアノ」の例にもみるように、当時の日本人が西洋のモノをシンボリックに取り入れることで、“見た目の西洋化”に尽力していた様子が窺える。

#### 2-2-4. 小物

表4より小物に関する用語としては、明治期が28件、9種類、大正期が18件、5種類、昭和戦前期が47件(表中44件、その他に3件)、7種類(表中6種類、その他に1種類)を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①額、額縁、懸物、幅、洋画の掛額②姿見、鏡③時計  
④花瓶、花活、盆栽、四季折々の花・枝⑤ランプ⑥硝子⑦火鉢⑧坐蒲団  
⑨コレクション、置物、像、珍像、珍書、珍器
- ・大正期 : ①額、絵、洋画の掛額、日本画、軸もの②生花、盆栽、花瓶、植木、花卉③電燈の笠  
④置物、金魚、陶器、壺⑤茶器
- ・昭和戦前期 : ①額、額縁、掛軸②姿見③美術工芸品、置物、器もの④植木鉢、盆栽、花の籠、一輪  
ざし、切り花、花瓶⑤電燈具、電気スタンド、電燈の笠、ブラケット、ガス燈、電気  
燈、天井燈、壁燈、シャンデリア、ランプ⑥ストーブ 他1種類

ここでの最大の特徴として、他の4つの項目と異なり、明治期は室内装飾関連記事総数が少ない割に、用語の数・種類共に登場頻度が高いことが挙げられる。種類に着目すると、①掛け物類や④花類、⑨置物類の用語のバリエーションが合計15種類(各々①5種類、④4種類、⑨6種類)と多い。そして、大正期になると、用語はこの“掛け物類・花類・置物類”の3種類にほぼ分類できていることから、当時はこの3種類が一般的な室内装飾品であったと考えられる。

また、1928年に富山房より出版された『日本家庭大百科事彙第二巻奥付』によると、

室内装飾といふことは、(中略)室といふものを単に塗り立てるとかいふ意味ではない。(中略)装飾といふことが表面的に、さういふ風に考えられ勝ちなのはよくない事である。

とある。ここから推測すると、この当時、室内装飾とは、室空間に“飾り物”をすること、という感覚が一般的に強かったことが窺える。

ところが昭和戦前期になると、登場する用語が一変している。その内容については、“飾り物”から“照明器具関連”の用語へと移行しているのである。それまで用語の多数を占めていた“掛け物類・花類・置物類”の3種類(①, ③, ④)は合計して13種類、それに対して⑤“照明器具関連”の用語は10種類と、これだけでほぼ“掛け物類・花類・置物類”の合計に近い数を確認することができる。これより、昭和戦前期には、西洋から様々な種類の照明器具や照明技術が伝わり、それらを紹介する記事が増えたことから、照明文化が急速に中流階級の生活に広まったことがわかる。その結果として、前述の“掛け物類・花類・置物類”を取り上げる記事が減少していると思われるが、表の結果からはこれらの装飾品がこの昭和戦前期に、どのように扱われるようになったのかははっきりしない。理由としては、これらが普及し、記事として掲載する必要が少なくなったとも考えられるため、その実態については調査を別に実施することが要請されるだろう。

### 2-2-5. その他

表5より、ここでは、これまで2-2-1～2-2-4の分類に当てはまらなかったものの、記事中より室内装飾関連用語として抜き出せたものを取り上げている。それらを分類すると、明治期が11件、6種類、大正期が16件、7種類、昭和戦前期が31件、7種類を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①掃除, 整頓, 清掃, 訪問時間②床③色彩(いろどり)④光線の具合⑤和洋折衷⑥花壇
- ・大正期 : ①住宅の改良, 和洋折衷, 洋風和化・和風洋化②洋館, 寄木細工の板張り, 和洋両用建具, 洋室の床の間③色彩(いろどり), 暖色④人間味, 藝術的感受性, 個性的な趣味⑤壁面の利用, 配列⑥日光⑦震災
- ・昭和戦前期 : ①椅子式の床, 天井, 床, 床の間, ファイヤープレイス②モダン, 団欒, 住み心地, 国民性, 単純化③お茶の間, モダン・リビング④押入れの改良⑤寒色・暖色, 色彩, 色の配合⑥均等照明, 局部的照明, 建築家照明・光築⑦アパートメント

この項目の特徴は、各時代の特色・流行・啓蒙の内容が表れていることである。それらを順にみていくと、明治期については、「①掃除, 整頓, 清掃, 訪問時間」に示すように、現在では“室内装飾”としては扱われない用語が登場している。ただし、茶人に第一に必要な条件として、掃き, ふき清め, 洗うことに関する知識(岡倉覚三, 1991)があげられるように、ここには茶道の影響が考えられる。大正期には、「①住宅の改良, 和洋折衷, 洋風和化・和風洋化」, 「④人間味, 藝術的感受性, 個性的な趣味」, 「⑦震災」に特徴がみられる。①は、まさに西洋化を表す用語で、この時代に今日の一般大衆の住宅の祖型が誕生した(内田青蔵, 1987, p.10)と言われていることから、登場頻度が高い理由が窺える。また④は、明治期には見られなかった、感性的な意味の用語である。これらを合わせ見ると、この時代は西洋的手段や考え方, しつらえの際の感性などを啓蒙していこうとする意図が感じられる。続いて⑦の「震災」であるが、これは大正12年に起きた関東大震災を示す。記事中には、この関東大震災の復興建築が、“室内装飾”を一般に普及することに大きく寄与した(小宮山豊房, 1925, p.p.66-69)との内容が示されていたことから、震災も西洋化の普及に一役を担っていたことがわかる。昭和戦前期は、「②モダン, 団欒, 住み心地, 国民性, 単純化」, 「③お茶の間, モダン・リビング」, 「⑥均等照明, 局部的照明, 建築家照明・光築」, 「⑦アパートメント」にみるように、カタカナの用語も目につくようになる。また、②や③にあるような価値付けを表すような用語も登場するようになり、室内装飾にも“生活する”という視点が加わってきたことがわかる。⑥については、2-2-4で先述したように、この時期に照明文化が中流階級の生活の中に大きな影響を及ぼしたことが、窺われる。⑦は、所謂、当時流行した都市住宅のことで、左右上下に長屋が組み合ったようなものことである。<sup>7)</sup>

なお、どの時期にも共通していた用語に「色彩」に関連したものがあつたことも注目したい点である。

### 2-2-6. 室名

表6より、室名については、明治期が22件、5種類、大正期が19件、5種類、昭和戦前期が77件、5種類を確認できた。用語を類似の種類に分類した内容(順不同)は以下に示す。

- ・明治期 : ①日本室, 日本間, 座敷②客室, 応接室, 寝室, 食堂, 化粧室③西洋間, 西洋室④寢床⑤階段, 廊下, 浴室, 便所, 台所
- ・大正期 : ①日本間, 日本風のお座敷, 日本室, 日本座敷, 純日本風の古式な畳敷②日本風客間, 居間, 洋風応接室, 談話室, 古風な客室, 洋風婦人室③西洋間, 洋室, 洋風の室④準西洋間⑤縁側
- ・昭和戦前期 : ①日本座敷, 日本風の室内, 日本風の座敷, 在来の座敷, 日本間, 日本室②居間, 書斎, 食堂, 寝室, 応接間, 客間, リビングルーム, 食事室, 応接室, 談話室兼食堂, 子供室, 寝間, 洋風居間, 洋風応接室③洋室(洋間), 西洋間, 洋風の室内, 西洋室④玄関, 台所, 配膳室, 浴室, 玄関広間, 階段室⑤納戸

ここではまず、用語の数に注目したい。昭和戦前期には明治期・大正期の3倍以上の室を表す用語が



登場していることがわかる。そこで、その内容をみると、昭和戦前期には、②において47件の用語が確認でき、同時期の総用語数に対して半数以上を占めている。中でも「居間(洋風居間を含む)」は12件と多く、これより居間を扱う記事が増加していることがわかる。(②は各時期に共通して“室用途がはっきりとした居室”を表している。)また、この時期に初めて「書斎」や「子供室」といった用語が登場することも併せて、用語数の増加は、室の機能や用途の固定化を目指していたことを表していると言える。

続いて「〇〇風」の表現が目立つ大正期についてである。それ以前の明治期は、客室や応接室など、接客の場を示す用語が多かったことや、以後の昭和戦前期は、先にも触れたように、「居間」を筆頭に室名のバリエーションが増加していることなど、時代の前後関係から流れを追ってみても、大正期当時は、この3つの時期区分の中で、最も西洋と日本が入り混じった複雑な時代背景のあったことが示唆される。

また、用語の登場頻度について、時代が下がるにつれ「居間」や「書斎」が「客室」や「応接室」などを上回っていることより、当時の居宅への関心が、従来の接客中心から家族中心へ(土屋元作, 1899, p.98)と移り変わりつつあることも示唆している。

なお、現代では当然のように使用している「和室」という用語が、ここで一度も登場していないことは興味深い。これについては、ここでは取り上げないが、別途調査を要することと考える。

### 3. 記事中の用語から見た室内装飾

近代日本の住宅における室内装飾について、記事中に使用された関連用語の分析により、把握できた結果を総合的に捉え、時期別に考察する。

#### <明治期>

明治期は室内装飾関連記事総数が少ない。しかし、「小物」や「その他」の項目に特徴が現れており、用語数、種類共に登場頻度が高い。“室内装飾”とは、“室空間に飾り物をする”ことという意識の強かった時期であり、また西洋の室内装飾を取り入れるに際して、現在では室内装飾とは言い難い「整頓」や「清掃」などを扱う記事が紹介されていた時期である。

明治期は、住宅の西洋化をめぐる論争が盛んに行われた時期(内田青蔵, 1992)とされているが、記事中の用語からも西洋化の導入に試行錯誤していたであろう様子を窺い知ることができる。

#### <大正期>

「その他」や「室名」の項目に特徴が現れている。この当時は、様々な住宅改良運動が活発化し、「住宅の時代」と言われた時期である(内田青蔵, 1992)。それほどに西洋風住宅の啓蒙が盛んであったが、先に挙げた2項目中の関連用語からも「住宅の改良」や「和洋折衷」、「西洋間」や「日本間」など、西洋化を意識した用語が確認でき、和と洋が入り混じった変化の時期であったことが見て取れる。

また、この頃の住宅改良運動から主婦を対象としたものも登場するようになった。例えば、1915年(大正4年)に東京上野で“家庭”をテーマとした日本初の博覧会『家庭博覧会』が開催されたことや、同年に、婦人を対象に建築の知識を説いた保岡勝也の『理想の住宅』が出版(婦人刊行会)されたことなどが確認できる(内田青蔵, 1992)。

加えて、既に2-2-5の項でみた、1923年(大正12年)に起こった関東大震災が室内装飾の普及の契機となったことなど、大正期は、婦人の間にも住宅そのものへの関心や知識が広まった時期であったと言えるだろう。

#### <昭和戦前期>

昭和戦前期は全ての関連項目で用語件数と種類が共に増加していた。このことは、2章でみた室内装飾関連の記事総数の増加に比例する。つまり、この頃に西洋風室内装飾が一般に普及・浸透し始めたと言えるだろう。

当時、時代は啓蒙の時代から実践の時代へと変化し始めていた(内田青蔵, 1992)。室内装飾においてもまた、その傾向は同様であったことは今回の結果からもわかる。特に注目したいのは、「家具関連」項目の用語の増加である。もともと家具の少ない日本の住まい(小泉和子, 1995)においては、この家具関

連用語の増加自体が西洋化の象徴であり、この時期に西洋化が急速に盛んになったことを顕著に表しているのである。

また同時に、この頃の記事では、室内装飾の在り方等が様々に論じられ始めている。その中から幾つかを次に抜粋する。

- ・ある女学校のクラスで、室内装飾の事をかいてもらつたらば、一番多いのは、その人の一番安心して坐はれる部屋であればそれでいい、といふ意味のものでした。(今和次郎, 1927)
- ・室内装飾の本義(中略)、或る藝術的の意匠に依って、其の室内の気分即ち調子や情味を巧みに整へて如何にも気持ちよくするといふこと(木檜恕一, 1927)
- ・先ず第一に考ふべきは、この室は「どんな気持ちでそこにゐたい」といふこと(清水良雄, 1928)
- ・室内装飾は、贅澤なものゝ必要はありませんが、すべて釣合ひと謂ふ事をお忘れにならない様にしたいものであります。(保岡勝也, 1931)
- ・色彩の配合、調和が、室の性質を決定するものであります。(和田順顕, 1931)

この5つの文章は、同時期に書かれた記事中の文章であるが、どれも共通して言えることは、気持ちや気分を良くするという内容が書かれていることである。

開国時より、日本が無我夢中に取り組んできた西洋化ではあるが、小泉和子が、「当時模範とした欧米には様々な様式が存在し、様式の混乱状態に陥っていた。そのような状況の中で、日本はどの様式を取り入れるべきなのかわからなかったし、基準もなかった(小泉和子, 1995).」と指摘するように、具体的な生活への導入となると、不明瞭な状況であった。そのため、ある程度西洋風が一般へ浸透・普及してきた昭和戦前期においては、より西洋らしい設えとするにはどうしたらよいか、何が必要で何が足りないか…、など西洋のものをただやみくもに取り入れる段階から、それらをどのように設え、そこでどのように生活をするのか、といった段階へと人々の関心が移り変わったのであろう。その上で、室内装飾にも定義を求め、同時に“これぞ西洋風”と言い切れる安心感を求めていたのではないだろうか。したがって、前述したように室内装飾における新しい価値観、新しい方法等が活発に論じられていたのではないかと考えられる。

## 結 論

日本の住宅におけるインテリアの西洋化は、西洋風の室内装飾の真似に始まった。この要となっていたのは“家具”と“窓装飾”であった。まず“家具”については、2-2-4 小物の項でみたように、近代までの日本では“家具”という文化があまり存在しなかったためか、家具や装飾品が並んだ西洋の室内は、華やかで煌びやかに見えたに違いない。近代までの日本では、装飾というと床や棚に小物を飾る程度のものであったため、人々は室内を装飾することとは、モノを置いて飾ることだと感覚的に理解していたのであろう。それゆえに、家具もまた、ピアノの例にみるように装飾品の一部という感覚が強かったと思われる。そして、その中でも“椅子”と“テーブル”の導入は、起居形式の変化を伴い、日本在来の設えを大きく変化させることとなったのである。

一方で、在来の日本家屋に存在しなかった“壁”の出現によって、様々なタイプの“窓”が登場した。その結果、半ば必然的に窓の装飾が人々の関心を集めることになった。

しかし、模範とした当時の欧米の室内装飾を取り入れるにあたり、何ら基準がなかったため、そこに様々な日本的な解釈を加えることになった。近代以前より日本の室内装飾の発展に影響を与えた、“もてなしの心”や“自然との調和”のような「茶道」の理念がここに加わり、同時に、新たな西洋の品が取り入れられ、日本的に解釈をする。こうした試行錯誤の結果が、現代の和様折衷のインテリア様式といえるだろう。

導入時に基準を設けなかったこと、西洋の文化や家具の用途などより外見を整えることに腐心したこ

となど、急ぎすぎた西洋化に人々については行けなかったのではなかろうか。なぜ昭和40年代に至るまで日本では“インテリア”が産業として認知されなかったのか。『茶の本』（岡倉覚三著、村岡博訳、1991）には以下のような文書があった。

人は自己の感情には無頓着に世間一般から最も良いと考えられているものを得ようとかしましく騒ぐ。高雅なものではなく、高価なものを欲し、美しいものではなく、流行品を欲するのである。

日本人がどう在りたいかよりも欧米の文化に憧れ、我らもそれに倣えとした西洋化の歴史。母国の文化を度外視し、文化や歴史に無頓着に西洋の品を取り揃えていったことはインテリアにおいても同様であったのだろう。そして、21世紀の現在、近代化の裏側で大切な日本の歴史や伝統を失ってきたことを反省し、西洋と日本、それぞれの良さを根本から学び直さなければならない次の局面に到達したのではないだろうか。

## 文 献

- 1) 内田青蔵：『あめりか屋商品住宅、住まいの図書館出版局、1987.
- 2) 内田青蔵：『日本の近代住宅』、鹿島出版会、1992.
- 3) 岡倉覚三著、村岡博訳：『茶の本』、岩波書店、1991.
- 4) 川崎衿子編、水沼淑子：『ライフスタイルで考える4 和・洋の心を生かす住まい』彰国社、1997.
- 5) 小泉和子：『室内と家具の歴史』、中央公論社、1995.
- 6) 木槍恕一：「室内装飾の心得」『婦人画報 第267号』、1927.
- 7) 小宮山豊房：「夏の室内装飾」『婦人画報 第238号』、1925.
- 8) 今和次郎：「室内装飾の事」『婦人画報 第260号』、1927.
- 9) 清水良雄：「室内装飾雑観」『婦人画報 第275号』、1928.
- 10) 杉本文太郎：『日本住宅室内装飾法 第5版』、建築書院、1911.
- 11) 土屋元作：『家屋改良談』、時事新報社、1899.
- 12) 東京室内装飾事業協同組合：『室内装飾からインテリアへ インテリア業界の変遷』、東京室内装飾事業協同組合、1990.
- 13) 福島琢郎：「室内装飾としてのピアノ」『婦人画報 第67号』、1927.
- 14) 福良宗弘：『茶の湯空間とはなにかー成立ちと構成』彰国社、1995.
- 15) 毎日ライブラリー：『一色彩と生活一』、毎日新聞社、1958.
- 16) 森口多里：「寒い季節にふさはしい室内装飾」『婦人画報 第178号』、1920.
- 17) 保岡勝也：「中流應接間の装飾」『婦人画報 第316号』、1931.
- 18) 保岡勝也：「住家の室内装飾に就て」『建築雑誌』、1905、第209号、p.p.277-284、第210号 p.p.337-344、第211号 p.p.29-34、第212号 p.p.452-456、第213号 p.p.490-496、第214号 p.p.544-551、第215号 p.p.618-622、第217号 p.p.43-48、第218号 p.p.97-102、第219号 p.p.153-158、第220号 p.p.236-242、第221号 p.p.556-560.
- 19) 和田順顕：「部屋の氣分を左右する敷物、壁紙、窓飾の選方」『婦人画報 第316号』、1931.

## 注

- 1) (内部の意)室内装飾。『広辞苑 第五版』、岩波書店、1998より。
- 2) 『日本家庭大百科事彙第二巻奥付』、富山房、1928より“室内装飾”の意味を示す。：「室内といふ空間に於ける立体感覚の美の表現。(中略)すべての室内装飾品が、彫刻的のものにせよ、絵画的のものにせよ、悉くこの感覚のもとに統一されて取扱われるものであること、一それが室内装飾の根本精神であらねばならぬ。」
- 3) 杉本文太郎(1911) p.48によると、「當時其装飾は甞に翠簾を懸け帷を垂れ、壁代を用る屏風を建つる等の如き

に過ぎず, 専ら前面の中庭に其美を借り, 謂はば室内頗る清楚の趣きを重じたのであります」とある.

- 4) 杉本文太郎(1911) p.501 より, 「總てのもの色の調和に注意を拂ふこと」とある.
- 5) 杉本文太郎(1911) p.541 では「更に以上の心得を以て, 尚ほ一層の風情をもとめんとするもの, 是ぞ實に我装飾の誇りとするところであります。」さらに「我は風情に伴ふの美を要求し, 風情に依れるの美を要求するにありて, ただ美, ただ麗, ただ艶なるは, 根底に感触を與ふるの力に足りないのであります. (同, p.543)と述べる.
- 6) 黒田鵬心:「春の室内装飾」『婦人画報 第210号』, 1923, p.47.
- 7) 『日本家庭大百科事彙第二卷奥付』, 富山房, 1928, p.66 より